

午後 I 試験

問 1

問 1 では、ステークホルダマネジメントについて出題した。設問 1(2)、設問 2 については正答率が高かったが、設問 1(1)、設問 3(3) 及び(5)については正答率が低かった。

設問 1(1)では、現システムに代えて新たなシステムを導入する際に、業務継続性を確保するための重要な作業について出題したが、正答率は低かった。移行作業を WBS 項目として計画することが重要であることを理解してほしい。

設問 3 では、ステークホルダを“関与度”，及び“影響度”という観点から分析し、その要求への対策を考える洞察力と課題解決力を問うた。

設問 3(3)では、最終的に利用する立場のステークホルダである利用部門に対しては、事前に正確に情報を伝え、期待値をコントロールしつつ、関与度をどのように高めてプロジェクトに参加させるかが課題となることを理解して解答してほしい。

設問 3(5)では、アドバイザーの立場にいるステークホルダをプロジェクトに巻き込み、関与度及び影響度を高める対策についての実践力を問うたが、正答率は低かった。ステークホルダに適切な役割を割り当てることで、プロジェクト体制が機能するように計画していくことが重要であることを理解してほしい。

問 2

問 2 では、システム化の方針に沿ったプロジェクト計画の立案や、リスクを認識しどのように対応するかといった実務的な側面について出題した。全体として、正答率は低かった。

設問 1 では、自社のこれまでの状況からプロジェクトマネージャとしてプロジェクトを遂行する上で何が課題なのかを考えて解答してほしいだったが、過去に発生した問題の対応だけに着目している解答が目立った。

設問 2(1)では、業務プロセス設計工程の完了以降にプロトタイプを利用部門に公開する目的について問うたが、プロトタイプの目的そのものの解答や業務プロセス設計への利用部門からのフィードバックに関する解答が散見された。利用者トレーニングが前倒しで実施されることから、スムーズに進まないリスクへの対策であることを読み取って解答してほしい。

設問 4(1)では、追加開発の見積工数が投入予定工数を超過した場合の対応について問うた。“追加開発の候補に優先順位を付ける”などの一般論的な解答が目立ち、正答率も低かった。“M 社メンバの支援を受ける”ことで何を狙ったのかを考えて解答してほしい。

問 3

問 3 では、スコープの変更への対応が必要になった場合の、ステークホルダとの調整、リスクの洗い出し、プロジェクト計画の見直しなどについて出題した。全体として、正答率は高かった。

設問 1(2)では、スコープの変更が必要になったのは、社内の開発標準の記述が不足していたからであるということに着目し、再発防止の観点から出題した。プロジェクトマネージャは目先の問題に対処するだけでなく、どうすれば、このような問題が起きなかったのかということまで考えて行動する必要があるということをよく理解してほしい。

設問 4(2)では、スコープの変更内容に関するウォークスルーの再実施と並行運用への影響について問うた。ステークホルダとの認識の相違があった場合に想定されるリスクを踏まえて、並行運用で起き得る混乱について解答してほしいだったが、混乱の内容ではなく、“初回のウォークスルーからの変更点に関する認識の相違”といった、認識相違の内容を説明する解答が目立った。